

月刊フェチノベ

No 1
2013

創刊号

人外娼館の管理人

十二屋月蝕

スキュラとドタバタ
エロエロにゆるにゆる生活

沈黙の天使

魔界王国ヴェルマギア

トラム・デル

神楽遊び

カムケン

お食べ退魔録

注文の多い調理師

Gooley and Sticky

大病

挿絵

Co-tea

もう！魔物娘しか愛せない

R18
Adult Only

イラスト
Co-tea

1 話 新人研修

廊下を、男が一人進んでいた。

礼服を思わせる、フォーマルな印象を与える衣装に袖を通した、二十半ばほどの男だ。

彼が進むのは淡い照明が等間隔に灯る廊下で、左右の壁には扉が並んでいた。一見すると宿屋のようだが、耳を澄ませば聞こえてくる小さな声と、焚きしめられた香に紛れるわずかな匂いが、扉の向こうでなにが行われているかを示していた。

ここは娼館。金銭と引き替えに、甘い一時を提供する施設だ。

男はこの娼館でいくつかの仕事を担っていた。帳簿の管理や、消耗品の補充、同業者との折衝に、『上』との交渉。そして、新人娼婦への教育だ。

男は客室の並ぶ廊下を抜け、建物の隅に設けられた一室の前に立った。

拳を緩く握り、木の板を数度たたく。すると、扉の向こうから声が返ってきた。

『はい、どうぞ……』

「入るぞ」

緊張した声音に、男は扉を押し開いた。

すると、ベッドと物入れぐらいいか置いていない、殺風景な内装が彼を迎えた。ほかの客室にある、柔らかな絨毯も甘い香りを立ち上らせる香炉もない。それもそのはず、ここは新人娼婦が練習するための場所なのだから。

「お、お待ちしてました……エニです」

ベッドに腰を下ろしていた娼婦が、緊張した面もちで頭を下げた。

金色の髪を、肩に届くほどで切りそろえている。歳の頃は少女から女に移り変わりつつあるほどだろうか。彼女はどちらかという少女よりの細身の体を、薄い衣装でふわりと包んでいた。

人によつては、前を紐で結んだだけの体が透けて見えるような衣装に身を包むなんて、と彼女の境遇を嘆くかもしれない。だが、それは彼女の腰から上に限った話だ。エニの腰から下は、濃い緑色の鱗が生えそろうた、巨大な蛇のものになっていた。

魔法や手術で、蛇の体を植え付けられたのではない。エニはそういう種族として生まれたのだ。

男は彼女の姿を軽く検分すると、頷いた。声が少し震えているものの、その内容はこの娼館で礼儀作法として定めている物の通りだった。

「ああ、そこまで緊張しなくていい。今日は礼儀作法の試験じゃないからな」

「は、はい……」

男の言葉を聞いたエニは、ほっと全身から力を抜いた。

「今日の内容は、聞いたか？」

「はい。技術の一通りの確認だとか……」

「それでいい」

エニの返答にうなづくと、彼はベッドまで歩み寄った。

「では、教わったとおりにやってみてくれ」

「はい」

彼女は腰から下を動かすと、鱗のこすれる音を立てながら、ベッドから降りた。

蛇体の腹側に並んだ白く細長い鱗が、むき出しの床板をとらえ、彼のそばまでエニを移動させる。

「失礼します」

彼女はそういうと、少しふるえる指で男の衣装にふれた。

上着を預かり、ベルトをゆるめ、少しずつ男を脱がせていく。これまで先輩の娼婦に教えられたまま、ぎこちない動きで彼の体に触れながらだ。

細く長いエニの指が男の体をなでていく。そして時折、彼女は思いだしたように男を見上げ、笑みを浮かべた。僅かな触れ合いと、正体の分からない笑み。その二つで、客を手軽に喜ばせられると、教えられていたからだ。やがて、男は一糸まとわぬ姿になっていた。しかし、ラミアのサービスを受けたにも関わらず、彼の陰茎は力なくうなだれたままだった。

「ええと……」

「来る客皆が期待に前を膨らませてると思うな。場慣れして、裸を見たぐらいでは何ともない者も多い」

戸惑う新人娼婦に男はそう説明した。

「そういうとき、どうすればいいかは聞いたな？」

「あつ……どうぞ、こちらへ」

エニは続く言葉を思い出し、男にそう告げると、ベッドを示した。彼は彼女の言葉のまま、ベッドに向かって腰を下ろす。

「お隣、失礼します」

床の上を鱗でこすりながら移動すると、エニも遅れて彼の傍らに腰を下ろした。そして、ほっそりとした指を男の股間にのばした。柔らかな男性器に彼女の指が緩く食い込み、軽くもむ。

「……………」

男は股間からじわじわと這い上ってくる心地よさを、無言のまま受け入れていた。異常に興奮しているわけでもないが、平静を貫こうとしているわけでもなく、彼の陰茎は与えられる刺激と快感に、徐々に膨張を始めていた。肉棒を指先で揉む程度だった彼女も、いつしか屹立を手で掴み、手のひら全体で揉むようにしていた。彼女の手の中で、男自身の体温と心拍が、屹立によって再現されていた。

「……それだけか？」

「え？ あ、そうでした……」

屹立への愛撫に夢中になっていたラミアは、男の指摘によって先輩の言葉を脳裏によみがえらせた。そして、先輩娼婦に教えられたまま、彼女は男の股間に向けて上体を倒し、形のよい唇を開いた。彼女の口内から桃色をした舌が延びる。ラミアという種族故、人よりも細く長いそれが男の肉棒に触れた。

勃起に伴い、大きく膨れた赤黒い亀頭の上をエニの舌が這い回る。塗れた舌先が残す唾液の軌跡は、屹立が宿した熱によって徐々に乾いていった。しかし唾液の痕跡が完全に乾ききる前に彼女の舌は新たに熱を帯びた粘膜をぬらしていく。

「……………」

亀頭をくすぐる刺激に男は声を漏らした。むずむずとしたその感覚は、まだ快感と呼ぶには未熟だった。しかし、肉棒を揉む彼女の指の動きとエニが彼の屹立を舐めているという事実は刺激を快感に消化させるのに十分な興奮をもたらした。

「んあ……………」

肉棒の半ばより下を掴みなおしたエニは、露出した亀頭のカリ首を、舌先でなぞった。蛇のそのように左右に割れた先端が谷間にカリ首を挟み込むようにしながら、ぬるぬると乾いた粘膜をぬらしていく。くすぐったさから成る刺激が、彼の腰から背筋をぞくぞくと這い上っていった。

「……………」

男が歯をかみしめ、彼の頭の中で歯と歯がこすれる音が響く。しかしエニにその音は伝わらず、彼女の懸命の奉仕がゆるむことはなかった。先端でカリ首や亀頭をなぞっているにすぎなかった彼女の舌は、いつしか男の屹立に緩く巻き付き、その表面で肉棒をこすっていた。舌の先、肉棒一巻きにも満たない長さの部分が、屹立に絡みついている。だが、ただ絡みついているのではなく、屹立の表面をぐるぐると擦りたてながら巻き付いているのだ。

唾液のぬめりが摩擦の刺激を弱め、舌肉の柔らかさが肉棒表面の凹凸が擦れるのを防ぐ。手の上下の動き

や単なる腰を前後させるだけでは再現できない、回転のもたらす快感が、男の腰の奥に生じていく。

「ん……うあ……」

エニの口が大きく開き、舌がさらに長く延びた。彼女の舌は、勃起する陰茎に巻き付いていく。やや色の黒い皮膚や赤みを帯びた粘膜を隙間にさらしながら、彼女の舌は肉棒を縛り上げていった。まるで、蛇が樹木に巻き付き上っていくかのように、エニの細く長い舌は屹立に絡み付き、大きく開いた彼女の唇の内へと消えて行っていた。

彼女の口中から舌を伝い粘りを帯びた唾液が肉棒へと垂れ落ちていく。

巻き付き、回転するような舌の動きはいつの間にか止まっていたものの、舌自体は男の分身に巻き付いたまま、微妙に波打ち、表面を凹凸させ、舌肉を伝わる唾液を肉棒全体へと塗り広げていた。エニの温もりが舌を伝わって屹立に届く。その一方で、巻き付く舌と舌の間を唾液が流れなでていく。舌肉の巻き付いた部分と、巻き付いていない部分のもたらす感覚の差が男の心臓の鼓動を少しずつ早めていった。

「……え……んあ……あ……」

エニが口を開いたまま、小さく声を漏らした。舌を絡みつかせた肉棒が、小さく脈打つのを感じたからだ。心臓の鼓動を再現するような力強い脈動ではなく、肉棒自体がふるえるような、痙攣のような脈動だ。

男性の絶頂の予兆。先輩に教えられた、いくつかの予兆の一つが今まさに彼女の舌の内ですり広げられていることに、エニは男が限界に近いことを悟った。このまま舌肉を絡み付かせたまま、男を射精に導いてやる。エニの脳裏をそんな考えがよぎるが、彼女はそれ以外の方法を探ることにした。

エニの口が、さらに大きく開き、舌の絡みつく屹立を彼女は丸ごと啜えた。肉棒は丸ごとエニの口内に収

まり、形のよい唇がすぼまって屹立の根本を締め付ける。そして彼女は口中の空気を吸い、頬肉でもって肉棒を舌ごと締め付けた。

男を、圧迫感と温もりが襲い、股間に注がれる甘い快感が膨れ上がった。舌肉が絡みついた部分だけが感じていた、彼女の体温と肉の柔らかさ。その二つが、肉棒が丸ごと口内に収まることにより、屹立全体を包み込んでいた。

「……っ！」

唇の締め付けや頬の内側の肉がもたらす圧迫感に男は小さく息をもらしながら腰を引こうとした。

だが、エニの腕はいつの間にか彼の腰に回り込んでおり、彼が逃れるのを許さなかった。

そもそも彼女の舌は肉棒に絡み付き、唇はきゅっと屹立の根本を締めあげているため、多少腰を引いたところで逃れられはしないのだが。

エニは逃げようとした男を罰するかのようになり、舌をうごめかせつつ屹立をすった。圧迫感により締め付けが強まる中、エニの舌肉が不規則に波打ち、屹立を刺激する。ぬめり、温もり、柔らかさ、締め付け。その四つに不規則な動きのもたらす摩擦が加わり、男は絶頂へと押し上げられた。

彼の口からうめき声があふれ、エニののど奥を白濁の奔流が叩く。

「……っ！」

のどを打つ粘液の感触にエニは軽くえづいた。だが、彼女は意志の力で肉棒を吐き出したいという衝動を押さえ込み、注がれる粘液に耐えた。

彼女ののどのふるえが、そのまま舌肉や口内粘膜の痙攣となり、男の快感を強める。快感に屈した男の射



精は、後から続く快感によって引き延ばされ、たっぷりとエニの口中に白濁をそそぎ入れていた。

やがて十数度に及ぶ屹立の脈動を経て、彼の射精が収まった。

「ん……む、う……」

口内の屹立が少しだけ柔らかくなるのを感じると、エニは唇をすぼめたまま、屹立に絡みつく舌をゆるめた。

そして口の中の白濁を一滴も漏らさぬように唇で肉棒の表面を擦りながら彼女は男の股間から顔をはなした。

カリ首を唇が擦り、最後にキスをするように亀頭から離れていった。

そして彼女は顔を上げて男の方を見ると、唇を開いて見せた。

「んあ……」

生臭い精液の臭いとともに、白濁にまみれた彼女の口内がさらされる。今にも唇の端から溢れそうなほど、白濁はエニの口中をたっぷりと満たしていた。

その大部分は彼女の唾液なのかもしれないが、それでも大量の精液を放った満足感を客に与えることができる。そうエニは教わっていた。

「……ん……んく……」

エニは開いていた唇を閉じると、目蓋をおろしながら顔を上げ、口内の粘液を数度に分けて飲み込んだ。一口分の唾液と精液のカクテルを飲む度、彼女ののどが上下する。

男の陰茎からほとばしった体液が今まさに彼女の胃の腑へと収まっていく。

「……ん……ぷは……はい、ごちそうさまでした……」

そして最後に、彼女はもう一度口を開いて、白濁を一滴残さず飲み込んだことを示した。

「いくらか忘れそうなところはあつたが……及第点だな」

「本当ですか？」

男の判断にエニはぱつと顔を輝かせた。

先輩から教えてもらった技術は十分客を楽しませるもので、いくらか危ないところがあつたとはいえ礼儀作法も身に付いている。それはこの娼館で娼婦として客を相手にできると言うことだった。

「まだ完全に合格した訳じゃない。前戯や口技については合格というだけだ」
うれしそうな彼女を落ち着かせるように男はそういった。

「まだ本番が残っている」

「はい、がんばります！」

ここまでくれば合格したに等しいが、彼女はそう気合いを込めて頷いた。

「なら、お手並み拝見といこう」

「はい！ それでは仰向けに……」

「いや、待て」

男は、エニの言葉に割って入った。

「俺が上になる」

「え……？ でも……」

「でも、何だ？　もしかして、客が上では相手はできない、とでも？」

「……いえ、やりませう」

エニは一瞬の逡巡を挟んで、そう応じた。先輩娼婦からは、エニが上になる場合の腰使いだけしか学んでいない。だが、どこをどうすれば男性を心地よくできるか、知識はある。エニが下になることで動きはだいぶ制限されてしまうが、それでも男を気持ちよくさせることはできるはずだ。

「失礼します」

エニは羽織っていた薄布の、胸の前の結び目を解いた。

しゆるり、と彼女の肩を布がなで、ないに等しい一枚によって隠されていた彼女の裸身が、完全に露わになる。控えめな乳房の頂では乳頭がびんと大きくなっていた。

そして彼女のへその下、引き締まった腰と蛇体の継ぎ目の少し下のあたりの鱗が上下に割れ、桃色の肉をさらしていた。彼女の女陰だ。彼女の陰唇は緩く広がり、内側から溢れる体液によって、てらてらと光を照り返していた。緊張しているとはいえ、男の肉棒を味わい、その精を取り入れたことで、彼女の肉体の準備ができあがっているのだ。

彼女は両手をベッドに着きながら、蛇体に力を込めて腰を浮かした。腰をベッドに移し、男がまたげるよう蛇体をまっすぐにすると、彼女は力を抜いて背中をシーツの上に横たえた。

「どうぞ……」

指を生殖孔の上下に添え、鱗の亀裂を広げながら、エニは男を招く。

彼はラミアの招きにベッドの上に膝立ちになった。

そして彼女の蛇体をまたぐと、肉棒に指を添えながら上体を倒す。

屹立の先端が彼女の桃色の亀裂に触れ、亀頭に熱とぬめりを伝える。

「入れるぞ」

「はい……」

エニの少しふるえた言葉を聞いてから、彼は腰を落とした。

屹立がラミアの女陰を押し広げ、彼女の体内に入り込んでいく。

「……………！」

入り込む屹立の感触にエニが小さく声を溢れさせる。

指や張り型を幾度となく受け入れていたため、破瓜の痛みはない。

だが、男の肉棒は指などより遙かに太く、張り型よりも熱く弾力があつた。

指では決して得られない満足感と、張り型では感じられない血の通う感触が、男の屹立から感じられた。

男が腰を沈めていくに連れ、彼女の膣は押し広げられていく。

にじむ愛液によりぬめりを帯びた肉孔は、屹立をなめらかに受け入れ、エニの意識に柔らかな膣肉と屹立

が擦れあう刺激を届けた。

体の奥を押し広げられる感触に、彼女の体が不規則に震え、男の亀頭がへその裏、子を宿す場所の入り口

に触れた瞬間、甘い吐息が溢れた。

「んあ……っ……」

「感じている演技も重要だが……客を喜ばせることを、忘れるな……」

男の言葉に、エニは意識の片隅で自分がなにをやっているかを思い出した。今、男とエニは客と娼婦の関係を模擬しているのだ。

客を喜ばせるため、先輩娼婦から教えてもらった知識を使わねば。

「ん……！」

エニは溢れそうになる快感の吐息をかみ殺し、腹の奥に力を込めた。

すると、彼女の膣内の圧迫感が強まり、肉棒が一回り大きくなったような感触を覚えた。

正確には、膣道を囲む筋肉に力を込め、締め付けを増したためだ。おかげで膣壁の裏を這い回る神経が肉棒に押し当てられ、屹立の膨張を錯覚したのである。

だが、それは同時に男に対しても締め付けのもたらす快感を生じさせていた。

暖かく、ぬめりを帯び、肉棒表面を控えめに撫でるばかりだった膣壁が、締め付けを強めて屹立に食いつく。

挿入の瞬間、亀頭によって割り開かれた膣壁が、離ればなれになった反対側の壁面を求めるかのように、肉棒を四方八方から圧迫した。

膣壁に並ぶ粒々とした突起が肉棒の表面に押し当てられ、男自身の脈動によって肉棒が小さく動くことで、亀頭や竿の表面を擦る。

「……動く……」

男は、股間に生じるエニの膣肉の感触を味わいながら、そうつぶやいた。

そして、エニの左右に両手を着き、体を支えながら腰を動かす。

男の肉棒がゆっくりと彼女の膣内から引き抜かれていく。

張り出したカリ首がキュウキュウと締め付ける膣壁を押し開き、膣道を擦りながら退いていく。

竿を締め付けていた部分が一度押し広げられ、ただでさえ高まっていた圧迫感がさらに強まる。それと同時に肉棒が抜けていった部分もたらず空虚な感覚が、エニの意識に届いた。

腹の奥を擦られていく快感と、一度押し広げられた膣肉が窄まる虚無感。その二つが、彼女に心地よさと切なさをもたらしていた。

やがて男の亀頭が顔を出す直前まで引き抜かれたところで、彼は動きを転じて腰を進めていった。ぬめる粘膜を擦りたて、空気を少し巻き込みながら、男の屹立が再度エニの内に入り込んでいく。

「……………あ……………！」

窄まる膣道を押し広げていく感覚と、腹の中を熱を持ったもので満たされていく感覚に、彼女は体内から絞り出すようにして息をもらした。

そして再び、彼女の子宮口を亀頭が軽く小突いた瞬間、彼女は小さく背筋を反らしながら、虚空に向けて舌先をつきだしていた。

溢れるあえぎ声は、彼女が軽く絶頂させられたことを示していた。

頭の内側に、快感と幸福感が溢れ、一切合切を委ねたくなる。

だがその一方で、感じさせられるばかりではなく、男を感じさせなければという使命感が、彼女の内に芽生えた。

「ん……………う……………！」

彼女は小さく声を漏らすと、頭の心を痺れさせる絶頂感を堪えながら、男の背筋に手を伸ばした。そして、かすかに震える指先で、彼の背中を軽くなぞっていく。

触れるか触れぬかといったざりざりの力加減を施された彼女の指は、男の背筋をくすぐる。

股間を包み込む温もりと柔肉の感触にエニのもたらすくすぐったさが加わり、男は小さく腰をふるわせた。

しかし彼は意識の内ですぐったさから生じる快感をねじ伏せると、もう一度腰を前後に動かす。

屹立が再び引き抜かれていき、膣道が龟头に擦られていく。

彼女の胸の内に空虚感のもたらす切なさが膨れ上がっていった。

しかし切なさがエニを押しつぶす前に、男は腰を突きだした。

熱を帯びた屹立が彼女の内側を満たし、奥の奥まで入り込んだ証とばかりに、子宮を軽く突く。

胎の奥に加えられた小さな衝撃は、彼女の背骨を伝わってエニの脳に入り込み、意識を大きく揺るがす快感の衝撃となった。

ほんの一突きで、また絶頂へと押し上げられそうなほどの衝撃が彼女を揺らす。

「……っはぁ……!!」

思わず甘い吐息を漏らしながら、エニは男の背中に回していた手をベッドにおろし、シーツを握りしめた。

そうやって快感に耐えなければ、男の背中に爪を立ててしまいそうだったからだ。

客には、そうやって爪を立てられるのを喜ぶ者もいるが、みんながみんな喜ぶわけではない。

決して、客に傷を付けるようなことをしてはいけない。

快感に揺らぐ意識の中、彼女の冷静な部分が、必死にエニの体を制御しようとしていた。

しかし、男の腰に力がこもり、また肉棒が引き抜かれていきそうになった瞬間、彼女の胸の空虚感が破裂するように膨れ上がった。

肉棒が引き抜かれていくのがいやだ。

すぐ後で、また膣内を満たしてもらえる。そう頭の中でわかっているのに、エニは肉棒が引き抜かれていくという気配に、胸の奥に突き刺さるような切なさを感じた。

肉棒が抜き去られるのはイヤだ。挿入したままにしてほしい。ずっとつながっていたい。

ラミアの本能と、興奮がもたらす肉体の衝動が、彼女の意識を支配していく。

そして、彼女の意識の制御を離れ、ベッドの上でまっすぐにのばされていた彼女の蛇体が動いた。

蛇体をまたぐ男の股間から腰へと巻き付き、下半身を固定する。

「うお……!?」

不意に絡み付いた蛇体に、腰を引こうとしていた動きを押し止められ、男は思わず声を上げていた。

「おい、待て……なんだこれは」

「気持ちよく、なってもらうんです……」

男の問いかけに、エニが上擦った口調で答えた。

「お客さんが動かなくても、もっともっと気持ちよくなれるんです……」

そう紡ぐエニの瞳は、興奮によって蕩けていた。

理性の光こそ宿ってはいるものの、どこか焦点があっていない。

肉体の欲望に意識をとらわれてしまっているのだ。

「ま、待て……っ!？」

男はエニを落ち着かせようとしたが、不意に股間を襲った蠢きに、思わず声を断ち切ってしまった。

肉棒を根本まで飲み込んだ膣道が、ぶぢゅりと濡れた音とともに波打ったのだ。

膣肉を締める筋肉を操り、場所を変えながら弛緩と緊張を同時に行った。

ただそれだけなのだが、愛液にぬめる膣肉は蠢動に伴い屹立の表面を擦りたて、肉棒の凹凸に生えそろうた肉の粒を押し当てた。

ぶりぶりとした、実際のところ多少凹凸しているだけにすぎないはずの粘膜の表面は、彼の亀頭やカリ首など敏感な箇所はもちろん、血管の浮かぶ竿表面を圧迫し、不均一な密着感をもたらした。

そしてそのまま、二度目の『波』が彼の肉棒を襲う。

肉の粒が膣壁の蠢きにあわせて、亀頭表面やカリ首、裏筋の膨らみなど、肉棒の全体を擦りたてていく。

「うぐ……お……お……!？」

肉棒への刺激に、男は苦しげな声を漏らし、快感に耐えた。

「ほら……我慢しないで、気持ちよくなってください……!？」

エニはそう男にささやきながら、彼の腰に巻き付く蛇体を動かした。

必然的に彼の腰が揺すられ、エニの体内で男の肉棒が動く。

彼女の膣内をかき回すような屹立の動きは、膣粘膜越しに彼女を刺激し、同時に男に圧力の変化による快感をもたらした。

「っあ、は、あ……!？」

歯を食いしばり、吐息を漏らし、男は股間を咀嚼するようなエニの生殖孔の蠢きを堪えた。

だが、男の必死の我慢にも関わらず、エニは蛇体の動きはもちろん、膣粘膜の締め付けや波打ちを止めなかつた。

「ほら、ほら……気持ちいいでしょ……？」

挿入の際に一緒に膣内に入った空気が、彼女の動きにあわせて肉棒によってかき回され、ぶぢゅぶぢゅと濡れた音を奏でる。

エニは体内をかき回す肉棒の感触とその音によって、男が彼女の中に入っているという実感を覚え、単なる快感とは異なる満足を胸の内に感じていた。

「く、う……」

男は、そんな幸せいっぱい、といった表情で自身を見つめるエニの姿に、彼女が完全に肉体の衝動に意識を委ねていることを悟った。

ここはおとなしく快感を受け入れ、一度彼女を絶頂させてやれば、正気に返るだろう。

男は説得をあきらめ、快感に少しだけ素直になり、全身から力を抜いた。

エニの蛇体が腰に巻き付いているため、彼自身の意志では腰を使えないためだ。

ならば、エニを絶頂させる方法の一つ。彼女の膣底を熱い粘液で思い切り叩いてやるのだ。

男の抵抗がなくなったことで彼を操るエニの蛇体の動きが、少しだけ大きくなる。

「あ……気持ちよくなって、くれるんですね……」

男の脱力に、エニは彼が快感を受け入れたものと判断し、うれしげに表情をほころばせた。

そのまま彼女は男の腰を前後左右に動かし、自身の膣内をかき回させた。

屹立が、波打つ膣粘膜を擦り、肉粒によって表面が刺激される。

膣肉の波打ちは屹立を吸うように動き、蛇体のもたらず不規則な動きが、圧迫感の変化をもたらす。ぐちゅりぐちゅり、と音が奏でられる度に、男の股間から生じた快感が、彼の全身を痙攣させる。

「うう……」

男は快感に顔をしかめつつも、絶頂へと素直に導かれていった。

そして、しばし屹立を肉孔に食らせたところで、彼の意識は限界に達した。

「……………！」

エニの蛇体の中で男の腰に力がこもり、彼の屹立から白濁が再びほとぼしる。

肉棒全体を締め付けられ、尿道が細く圧迫されていたせいか、射精の勢いは彼女の口中に放ったときより、強まっていた。

「ん……………あ……………！」

肉棒の膨張と直後の熱を帯びた衝撃に、エニが声を漏らす。

待ち望んでいた迸りに彼女は体を小さくふるわせた。

注がれる体液を一滴も逃すまいと、ラムアの膣道が引き締めまり、肉棒を締め付ける。増した圧迫感、男をさらなる高みへと引き上げていった。

「っ……………う、う……………！」

肉棒を揉みたてられ、体液を搾り取られていく感覚に彼が低く声を漏らす。

絶頂の快感は心地よいが、それは彼の意識を徐々に削っていた。このまま彼女の肉孔に飲み込まれていては正気を失いかねない。

「男は弛緩させていた四肢に力を込めると、彼女の胎内から屹立を引き抜こうとした。

だが、彼の小さな身動きに、エニの蛇体が締め付けを強める。

「あが……!?」

「ん……あ、だ、め……!」

あえぎ声混じりにエニはそう男に囁いた。

「もつと……気持ち、よく……!」

客を喜ばせる為なのか、自身が楽しむ為なのか、おそらく本人にも区別は付いていないのだろう。

しかし彼女の蛇体は男の体に巻き付き、その全身を覆っていく。

鱗が覆う表皮を一枚隔て、蛇体を成す筋肉が男の体に巻き付く。

彼の腕や胸郭の膨らみにあわせ、蛇体の表面はなめらかに凹凸し、彼の肌にぴったりと密着していった。

男の二の腕に食い込む鱗が彼の腕を縛り上げ、腰から上をがんにがらめにする。

「う……ふ……う……!」

蛇体の締め付けに男は苦しげに声を漏らした。

しかし呼吸が絞り出されるほど締めあげられているというのにエニの胎内に沈む分身は大きく屹立し、未だ白濁を噴出させていた。

彼を襲う苦痛がもたらす生命の危機に、男の肉体が子孫を残そうと躍起になっているのだ。

しかし、彼の肉体が起こす必死の射精はエニの子宮を叩き、彼女を喜ばせることしかできなかった。

「ああ……！もつとお……！！」

エニがねだるように言葉を紡ぎ、締め付けを強めていく。

興奮の熱を帯びた彼女の蛇体が男の腹に食い込み、内蔵を圧迫していく。

「……う……っ……！！」

もはや声にもならない低いうめき声のような音が彼の口から溢れた。

締め付けのあまり彼の呼吸は止まり、足の先はすでに鬱血を始めている。

だどいうのにエニは彼から白濁を搾り取るうとするかのように、膣肉を蠢動させ、蛇体の締め付けを強めていった。

みしみしと、彼の頭の中に音が響く。ごうごうと、耳の奥で血の流れる音がする。呼吸が止まったせいで、男の意識は徐々に曖昧になり、全身をさいなむ苦痛が臍になっていく。

そして、放つ精液もなくなり、エニの体内でびくびくと肉棒が脈打つだけになった頃、固い物がおれるような鈍い音が響いた。

「すみませんでした……」

娼館の一室、ベッドと物入れしかない殺風景な部屋で、エニはベッドに腰掛けたままうなだれていた。

「客に気持ちよくなつてほしい、という気持ちは確かに感じられた。しかし、自分が快感におぼれてしまつてどうする？ 客は、お前の肉欲を満たすための道具じゃない」

シーツの入った箱状のワゴンを背に、男はエニを見下ろしながらそう言った。

フォーマルな印象を与える衣装に身を包んでおり、衣服越しではあるがその全身に傷一つ付いていないのが伺える。

「はい……理解してたつもりでした」

男の説教にエニはそう応えた。

「もう少し、快感を我慢する訓練が必要だな。俺が相手だったからよかつたものの、客の骨を砕かれては困る」

「すみませんでした……」

幾度目になるかわからぬ一言を紡ぐと、彼女の目から熱いものが溢れた。説教されて涙を流しているのではない。自分が未熟だったことを自覚し、その情けなさに涙が溢れているのだ。

「シアには俺が言っておく。もうしばらく、練習するんだな」

「はい……」

男はエニの返答を聞くと、背後にあったワゴンに手をかけて、押した。

シーツの入ったワゴンは、キィキィと車輪のきしむ音を立てながら、男とともに部屋を出た。そして、彼は部屋の戸を閉じると、ため息をついた。

ほぼ合格だと思っていたのに、あんな弱点が露呈するなんて。

エニを認めていただけに彼女の失態は男にとっても悔やまれるものだった。

だが、ここで甘い判断を下しては、客の骨を砕いてしまうことになる。

この娼館に来る客はほとんど、一度死ねば終わりなのだ。

男は、ワゴンに詰め込まれたシートに触れると、妙にねじれた腕をシートの下に隠すように動かした。

シートのほかになにやら重いものが入ったワゴンは、キイキイと車輪をきしませながら、男の導くまま廊下を進んでいった。